

令和7年度 千葉市 英語教育改善プラン

目標

- ・小中連携を意識した言語活動を通して指導する授業の推進
- ・言語活動の充実に向けた授業づくりにおける学習者用デジタル教科書の活用促進

☒ 言語活動
 ☒ 指導と評価の一体化
 ☐ 教師の英語力・指導力
 ☒ 校種間連携
 ☒ ALTの参画
 ☒ ICTの活用
 ☐ AIの活用
 ☐ その他

(パフォーマンステスト含む)

(専科教員含む)

(AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

- ①学習のゴールを児童と共有し、その達成のために必要な言語活動を設定する学習指導が行われるようになっていく。
- ②振り返りカードには内容面、言語面について具体的に記述し、自己評価を行わせる学校が増えている。

未だ改善が必要な点

- ①学習者用デジタル教科書の活用においては、効果的な活用について事例等の周知が必要である。
- ②パフォーマンステストの実施校がまだ多くはないので、その効果や評価への活かし方について周知していきたい。

2. 要因分析

- ①テーマを「言語活動の充実」とし、研修会等で実践報告や指導方法、内容について伝達研修を中心に行ったことによって、改善したと考えられる。
- ②研修会の内容で評価方法について取り上げ、各校の実践について情報交換を行った。また、振り返りカードの内容について周知を図ったことによって改善したと考えられる。

- ①学習者用デジタル教科書を活用している学校は増えてきてはいるが、個別最適な学びに繋がる効果的な活用法や、授業内での活用場面等について、情報交換を行う機会が少なかったことが要因と考えられる。
- ②人力的な課題があることや、その効果や進め方についても理解が深まっていないことが要因として考えられる。

3. 目標を達成するための施策・事業

- ①②千葉市スタンダードの作成及び研修会の充実
 - ・小中連携を柱に、小中の学びの繋がりを意識した言語活動についての提案を加えた千葉市のスタンダードの作成を進める。英語専科、学級担任の両指導者にとって指導の指針となるもの、学習者である児童が指導者によって差異を生じないようにするためのものとして、市内小中学校に示していけるようにする。また、市全体、地域ごとの研修会でも言語活動の好事例について紹介していく。さらに、振り返りカードについても同様に、研修会等で情報共有したり、活用しやすいように振り返りカードのデータを共有したりできるようにしていく。

- ①学習者用デジタル教科書活用の推進
 - 端末に「BEST MIX GIGA」と称するICT活用の実践について紹介を行っているので、学習者用デジタル教科書の活用についても好事例を掲載し、周知できるようにする。また、研修会等でも活用法等について紹介し、活用促進を図る。
- ②ALTを活用したパフォーマンステスト実施の推進
 - 児童の意欲を高めるため、また、適切な評価をつけるために、「話すこと」におけるパフォーマンステストの効果や実施の基本的な流れ等について研修会等での周知を図る。中学校での「即興的なやり取り」を行う力を育むことに繋がるよう、テストの内容についても共通理解を図るようにする。

令和7年度 千葉市 英語教育改善プラン

目標

コミュニケーションを行う目的・場面・状況に応じて、情報や考えなどを理解したり、表現したりすることのできる生徒を育成する。

○CEFR A1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合 (R6: 51% ⇒ R7: 60%)

☒ 言語活動 ☒ 指導と評価の一体化 ☐ 教師の英語力・指導力 ☒ 校種間連携 ☐ ALTの参画 ☐ ICTの活用 ☐ AIの活用 ☐ その他
(パフォーマンステスト含む) (AIを除く)

1. 目標に対する現状

①学習者用デジタル教科書を50%以上の授業で活用した学校の割合が増加。豊かな表現活動を支える知識・技能の向上に寄与している。(R5:19%⇒R6:48%)

②R6全国学力・学習状況調査において、一文一文でなく、概要や要点を聞き取る活動や読み取る活動が行われたと回答した生徒の割合が向上した。目的意識をもって英語を理解する活動が盛んになっている。

(聞く R5:79%⇒R6:84%)

(読む R5:80%⇒R6:86%)

①R6全国学力・学習状況調査において、即興で自分の考えや気持ちなどを英語で伝え合う活動が行われたと回答した生徒の割合が低い水準にとどまり、話すことの力を伸ばすには不十分である。

(本市:66%、全国:69%)

②小学校での学びを活かし、音声で慣れ親しんだ語彙を効果的に書く活動につなげていく指導の実践が少なく、書く力を伸ばすことが十分でない。

③言語活動を効果的に繰り返す指導が十分に行われていない。

2. 要因分析

①教科主任研修会等において、全校に実践報告を依頼し、紹介したことで、効果的な活用方法が広まったと考えられる。

②指導と評価の一体化のため、目的・場面・状況を踏まえ、概要や要点などを捉える活動での思考力・判断力・表現力の育成が必要であることが、教科主任研修会や市の教育研究会等で広められたと考えられる。

①生徒の活動を円滑に進めさせることに注力するあまりに、フォーマットが与えられた表現活動が多くなり、自らの力で英文を構成しながら表現する活動が少ないことが要因と考えられる。

②中学校教員が小学校の学習内容を十分に把握できていないと考えられる。

③有効なフィードバックをその後の言語活動に生かしていく指導方法が十分に周知できていない。

3. 目標を達成するための施策・事業

①研修会等を有効に活用し、学習者用デジタル教科書の音声の有効に活用する学習法やデジタルコンテンツの効果的な利用方法などを市内英語教員に周知する。特に留意してほしいことや見識を深めていただきたいことについては、報告を全参加者に依頼するなどの工夫を行う。

②指導と評価の一体化によるさらなる指導の充実を目指し、指導計画や目標、評価の在り方についての周知を図るため、研修の充実や教育研究会との連携を行う。

①、②、③千葉市スタンダードの策定及び周知を行う。市内小中学校の教員が指導する上で共通の指針として参照する千葉市スタンダードを策定し周知を図る。策定に当たっては協力校での実践研究を行いながら内容を精査するが、即興的な表現活動の充実や小中の学びの接続、言語活動の効果的な繰り返しについては重要な事柄として扱っていく。策定後はあらゆるチャネルを活用し、周知を図る。スタンダードを踏まえた授業実践の好事例については情報共有し、教員にとって使いやすいものとなるよう工夫改善を行っていく。

改善が進んだ点

未だ改善が必要な点

令和7年度 千葉市 英語教育改善プラン

グローバルな視野で活躍するために必要な資質・能力を育成するために、英語を通じて、相手の考えを理解し、自分の考えを相手に分かりやすく伝えようとする姿勢を身に付ける。

目標

○CEFR A2/B1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合
(R6 : A2以上 100%、B1以上 65% ⇒ R7 : A2以上 100%、B1以上 80%)

☒ 言語活動 ☒ 指導と評価の一体化 ☒ 教師の英語力・指導力 ☐ 校種間連携 ☐ ALTの参画 ☐ ICTの活用 ☐ AIの活用 ☐ その他
(パフォーマンステスト含む) (AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

未だ改善が必要な点

①授業における、生徒の英語による言語活動の割合が増加した。国際教養科においては、いずれの科目で75%以上の時間、言語活動を行っている。
(R5:71%⇒R6:88%)

②英語コミュニケーションⅢでの英語担当教員の授業における英語使用状況において、全ての教員が75%以上と回答している。
(R5:50%⇒R6:100%)

①スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した科目の割合について、引き続き改善の余地がある。
(R5:58%⇒R6:60%)

2. 要因分析

①英語担当教員の授業における英語使用状況が7割以上を占めていることから、生徒が英語に触れる機会が充実し、実際のコミュニケーションの場面が増えたことが要因として考えられる。

②新学習指導要領実施初年度の学年において、言語活動を中心に据えた授業展開を実施してきたこと、共通ワークシートの活用、指導主事訪問等でのinputとoutputを毎回の授業で実施するよう指導してきた成果が要因として考えられる。

①片方しか実施していない科目のうち、スピーキングテストが実施されていない科目が全体の約3分の2を占めており、特にスピーキングテストとライティングテストの両方を実施している科目は、学年が上がるほど低下していることから、高学年になるにつれ、入試に特化した技能に重点を置く傾向にあると考えられる。

3. 目標を達成するための施策・事業

①学びを実体験に活かすための施策・事業
授業において言語活動を通して身に付けた英語力を、実際の生活の場面の中で活かす事業を推進する。例えば、SSH事業における韓国連携校1校とのオンライン交流事業（非英語圏の国との交際交流を通じた授業外の活動）

②教員の英語力および授業力を改善するための施策・事業
「教師の英語力・指導力の向上のための実践的オンライン研修」への各校、毎年1名ずつの推薦を通じて、外国語教育に関して中核として活躍が期待される教員の育成を推進し、本改善プランを各校と共有しながら、英語科全体の授業力向上に寄与していく。

①指導と評価の一体化の推進
観点別評価の本格導入から3年が経過し、着実に浸透しつつある今、今後は校内研修や指導主事訪問などを通じて、CAN-DOリストに基づいた指導と評価の一体化を英語科内で的確に共有し、スピーキングを含む4技能の調和のとれた評価の着実な実施を推進していく。

千葉市教育委員会

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
高等学校	①CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		100	100	100	100	100		100		100	
	①CEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		80	77	80	65	80		80		80	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（％）		75	71	75	88	75		75		75	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した割合（％）		100	58	100	60	100		100		100	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100	100	100		100		100		100	
		公表（％）	100	50	100		100		100		100	
		達成状況の把握（％）	100	100	100		100		100		100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（％）		100	67	100	83	100		100		100	
	⑥英語担当教員の授業における英語使用状況（％）		75	79	80	72	80		80		80	

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
中学校	①CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		60	47	60	51	60		63		65	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（％）		85	64	85		87		89		91	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した割合（％）		90	70	85		90		95		100	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	90	93	100		100		100		100	
		公表（％）	50	43	70		80		90		100	
		達成状況の把握（％）	50	44	70		80		90		100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（％）		60	46	49	41	52		56		60	
	⑥英語担当教員の授業における英語使用状況（％）		70	57	65		70		75		80	

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
小学校	「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	60	63	65		70		72		75	
		公表（％）	25	36	45		50		53		55	
		達成状況の把握（％）	60	50	65		68		70		72	